

関心を持って

松江市立八雲中学校 二年 川上流菜

「差別なんて関係ない。」そう思っている人はどのくらいいるだろうか。最近では、「差別」という言葉をよく聞くようになった。私は今まで、差別なんて私には関係ないことだと思っていた。だが、この人権作文を書くにあたって差別について考えてみると、とても身近な存在だったと気付いた。

私には、幼い頃からアトピー性皮膚炎という病気がある。アトピー性皮膚炎とは、かゆみを伴う湿疹が出る病気だ。子どもの頃に発症することが多く、一般的には成長するにつれ症状が良くなっていく。私も、今ではすっかり良くなったが、幼い頃は症状がとてもひどかった。肌をかいてしまうと症状が余計にひどくなってしまいうので、幼い私はこれ以上症状をひどくしないように、我慢することに必死になっていた。同い年の子たちと比べたら、少し大変な生活だったかもしれないけど、自分のことを不幸だと思ったことは一度もなかった。

そんな私には、周りの大人や友達からよく言われていた言葉があった。

「かわいそう。」

この言葉にはどんな意味があるだろうか。言った人は、心配や優しさの意味でこの言葉を使っているのだろう。でも、私はこの言葉を言われて、心配してくれて嬉しい、優しいな、とは思えなかった。ただ、私はアトピーだということだけで、周りから哀れな人、不幸な人だと思われている気がして、とても悲しくなった。「かわいそう。」という言葉は、無意識のうちに自分と相手の間に高い壁をつくってしまう。それは、たとえ言った側がそういうつもりではなかったとしても、「差別」になるのではないだろうか。私のあの体験は、差別だったんだと気付いた。

でも、自分はどうかだろうか。外出をしているときなどに、車いすで移動している人や、盲目で白杖をついている人たちを見て、「かわいそう。」と行ってしまっていた。私は、昔自分が言われて嫌だと思っていたことと全く同じことを、障がい者の方たちに対して心の中で思っていたことに気付いた。私も差別をしていたのだ。

「差別なんて関係ない。」私は、これまでずっとそういう考えを持って生きてきた。でも、この作文をきっかけに、差別はとても身近な存在で、誰もがされるかもしれない、してしまうかもしれないものなんだと知った。きっと、私と同じように「差別なんて関係ない。」と思っている人はたくさんいると思う。でも、だからこそ、「関係ない」で終わるのではなく「関心」を持ってほしい。そうすれば、「差別」という事柄を、主観的にも客観的にも考えられるようになるのではないだろうか。

私一人が意識するだけでは小さな力かもしれないけれど、その小さな力がみんなに伝わって大きな力になれば、きっと平等な世界は実現できると思う。私は、その小さな力になれるように、差別に関心を持って生きていきたい。